

12月発行が少ない分、今回は前後編でお伝えします。半ばむきになっています。あはは。

さて、前編では医師は病院にいればいるだけ仕事が増える、というお話をしましたが、それではやがて限界が訪れます。個人的には休むのも仕事の一環だと考えています。仕事からきっぱり離れる時間を作ることは、質の高い診療を行うために不可欠だと思っています。

というわけで、当院の方針として研修医は働き方改革におけるA水準、つまり年間960時間以内の時間外勤務時間を守ることにしました。これは現状の研修医の勤務時間を分析した結果、この範囲に収まる、と分かったためです。

そのために、いくつか現行のやり方を変える必要が出てきました。大きな変更点は、なんと言っても夜間救急です。これまでは1年目と2年目、1人ずつが24時まで（休前日は朝まで）「当直」をしていましたが、来年4月からはどちらか1人が「23時までの延長勤務+朝まで当直」、もう一人が「23時までの延長勤務のみ」とする予定です。当院ではスタッフドクターが4名、さらに小児科、産婦人科、麻酔科、救急科が当直しており、必ず上級医と診療することになるので心配は少ないと思います。

当院のような地域中核病院では、夜間救急は昼間の研修と異なる学びがありますから、外すことができません。一方でその分、昼間の診療科研修の時間が減ってしまいます。そのため、研修できる診療科の数は少なくなります。できれば8週間を基本単位で回るほうが研修が充実すると、私は思っています。もちろん、体調や勤務状況を鑑みてですが、自己研鑽を組み合わせる時間減を補う方法も取り入れて良いと思います。仕事との切り分けの難しいことが玉に瑕ですが。



ただ、「自身が成長している」という実感があれば、多少忙しいことには多くの人は耐えられます。「鉄は熱いうちに打て」という言葉も一理あると思います。心のエネルギーが無ならない範囲で、研修医としての2年間を充実させてほしいと思っています。すっかり冷めた年になった私ですが、冷間鍛造って冶金方法もあるから、頑張らないと。

にっこり笑って仕事ができると、患者さんも良くなります。雪だるま人気でした。